田村
八嶋
箙
兼平
巴

五　78

特259
820

始

坂戸金剛拾
九代右近氏
但遺稿據二
拾三代右京
氏慧之鈔校

特259
820

田村

梗概　（所）京都　（季）三月

「田村」は京都清水寺が大同二年行叡居士の告げを得て沙門延鎮が将軍田村麿に伽藍の建立を受けしと云ふ古事來歴を例に依り旅僧に花守の物語せり境内地主の櫻の花盛と音羽山を背景に眺めたる對話の美しさ實千金の値なるべし後に至り坂上田村麿の姿にて現れ鈴鹿山にて東夷を平げし時此観世音虚空に現じ千の御手に大悲の弓智惠の矢を番へ放つ矢鋒は雨霰と降懸り敵勢は容易く亡ひ失たりといふ観世音の佛力廣大無邊なる事を作れり。

田村（三番目）太鼓ナシ

役別		装束附
シテ	童子	面童子 黒頭 着附縫箔 水衣 腰帯 扇 萩箒
後シテ	坂上田村麿	面平太 黒垂 梨子打烏帽子 白鉢巻 着附厚板 半切 法被右肩脱 腰帯 太刀 扇
ワキ	旅僧	着流僧（角帽子 着附無地熨斗目 水衣 腰帯 珠数 扇前ニサス）
ワキツレ	従僧二人	ワキ同装（又ワキツレ無シニテモ）

田村

鄙の都路隔て来て。鄙の都路隔て来て。九重の春に急がうよ。

是ハ東国方より出たる僧にて候。我未都を見ず候程に。此春思ひ立都へ上り候。

頃もはや弥生半の春の空

影も長閑に暮るる日の霞む彼方や
音羽山　滝の音も静かに清水寺
見えにけり（セリフ有）　おのづから。
春は手向と成まゝ地主乃桜の
花盛り　上　夫もの名所多しと
いへども此寺の地主は桜に喜くはなし。

されば大慈大悲の春は花ぞかし。
十悪の里よかふばしく二十三弁の
あきは月。音羽の水に影清し
中
子守は振袖乃おまえは時なれや
上
○小謡
白妙の雲も霞も里まで
何れ桜の梢ぞと見渡せば八重

一年ぶれ九重の雲の空も　四方の
山なみ長閑(ノドカ)にて春の気色(ケシキ)は面白(オモシロ)や

ワキ　ふしぎやなこれ
なる人を見れば、よしありげなる
姿にて玉箒(タマバウキ)を持ち、花の陰を清め
給ふは、花守(モリ)にてましますか

シテ　さん候是は此地主権現に仕へ申(ス)者也。
春は花の下(モト)を清めさながら木陰を
[illegible]　宮守とや、いはん又花守(モリ)とや
中々すゞきよし　何れの身の為なり共
おとよ里和光(クワウ)同塵(ヂン)の結縁の人なれぞ
よし有(ル)者ぞと思(ボ)し召(メサ)れ迎へとよ

ワキ 扨ハ宮奴にて候ひけるや。然らバ
當寺の御来歴委敷御物語候へ
シテ いで〳〵語て聞せ申さん。抑當寺
清水寺と申事ハ大同二年の御草創
坂の上の田村麿の御願也。むかし
大和の国小島寺に延鎮と云し沙門。

正しき生身の観世音を拝まんと誓ひしに
或時淀川の水上より金色の光
さしけるを尋ねて上れバ此瀧壺に
至りぬ。観音の仏像光明赫奕と
して顕ハれ給ふ。又山上乃木の間
より灯火の影不の示寸しを怪しめ

登てみれば一人の老翁有。名を問て
いはく我は是行叡居士といへり。
吾此地に住で七百歳なり。汝此所に
有て一人の檀那をまち大伽藍を
建立すべしとて東をさして行きぬ。
此事世以て隠れなければ坂の上の
田村麿。御願伽藍建立し千手の
佛像を作りまつて都鄙安全の
尊容とせり。然れば行叡居士を
いはゞ観世音菩薩の御再誕又檀那
を待と有しは是坂の上の田村麿

地上 ○小謡

今も其名は流れきたる清水の

深き誓も數々に、とりわけ千手の誓ぞ
頼もしき誓普ねくて万民を
濟度の大悲乃影ぞ有難き實や
安樂世界より今此娑婆に示現
して我等が爲の観世音仰ぐも愚
成りや　當寺の

此來歴ハ知りもせぬ。掛ゝ渡りたる
山ハ峯も名ハ名にて　して　氣比の峯
名ハ名にて此お寺も又ヶ岩ハりん
先ヅ是より南ハ嵩で塔婆の在れ
させ給ふハ此成寺とかハれぞ　して　この寺ハ
清岸寺歌の中山今熊野までも知りなく

見えてハ　又是より北に當りて。
見ゆるも塔婆のミえ候ハいかなる寺と
やらん　あれこそ上なき鷲の尾
の寺や。先ハ見渡せば音羽の山の
嶺よりも出づる月の輝きてハ此花の
梢にうつる景色先ハ是ぞ忽ちの

事なき　寔に是こそ暇をし
れ異情な花春の一時　をしむ
惜むべし　をしむべしや
春宵一刻直千金　花に清香
月に陰　寔に千金にも替へじとは
今此時かや　あら面白の

地主の花の気色やな桜の木の間に
洩る月の雪もふる夜嵐の誘ふ
花とつれて散るや心なるらん

中　仕舞

げに名にしおふ花の都の春の空
実に時めける粧ひ青陽の影緑
にて風長閑なる音羽の滝の白糸
を繰り返し返しても面白や有難
や地主権現の花の色も異なり

上　して

唯頼め標茅が原のさしも草
我世の中にあらん限りの御誓願
濁らじものを清水のみどりもさすや
青柳の実も枯るゝ木なりとも

花さくら木の梢の春も惜し
なべて長閑き影は有明の天も花に
酔へりや面白の春べや花あかりの
雲かや

上　ロンギ

実や気色を見るからに
唯人ならぬ粧ひの其名いかなる人
やらん

して　いふともいさや其名も

白雪の跡を惜まば此寺に帰る方を
見給へ
帰るや何処芦垣の間近
き遠近の

して　たづきも知らぬ
山中に
覚束なくも思ひ給
はば我が行方を見よやとて地主権現
の御前より下るかと見えしが。下りは

さて坂の上の田村堂の軒もるや。
月のむら戸を押し開けて内に入らせ給ひ
けり内陣に入らせ給ひけり　中入
ワキ 三人 上 夜もすがら散るや桜の蔭に寝て
〱花も妙なる法の庭迷はぬ
月の夜と共にかの経を読誦する

かの経を読誦する
ツレ上 一声 [illegible]の
折柄や地主権現の花盛り清水寺
の滝津波と一つにてこれ流れを汲んで。
他生の縁ある旅人に。詞をかはし
夜声の読誦ぞ則ち大慈大悲の。
観音擁護の直道なり　シテ上オク
ワキ ふし

ぎやかなものゝ光ず移ろひて其極
まづる事男躰の甲冑を常とし之
弱ふハ成人にて海し捨ぞ
是も人皇五十一代平城天皇の
御宇に有し坂の上の田村麿東夷を
平らげ悪魔を鎮め天下泰平

の忠勤たりしも即ち当寺の佛力
なり　されバ君の宣旨に擬別
鈴鹿の悪魔を鎮め都鄙安全に
那須だしとの御祈に依て軍兵を調へ
既に趣く時節に至ッて観音の
佛力に寄奇特を現し立願をしみ

しテ 中 ヨ

梅しぼの瑞現あらさなきまで
拈華微笑の教へを含むで後悠久
凶徒は未だ立たずとも 普天の下
率土の内の法王地にあらざるや
殊て名はしおふ関の戸ささで逢坂の
山を越えば浦波の粟津の森や

かげろふの石山寺を伏し拝み行くも
遠近も一佛と影をあひに近江路
や瀬田の長橋踏み鳴らし駒も足並や
すゝむらん 上 硯に伊勢路近江路
山そく ヨ 馬の道も先急がん
とりどり色を見せたる梅が枝の花も

紅葉も色めきて猛き心があら称
乃ち是も我等が大君の神徳に
なほより観音の擁護ひ仏力といひ
神力も擁護にあまらせ給ふと
さらでさへ康の康康も御罰せし
代々とも思へども未だ例なかりけり

上
去程に山河を動かす鬼神の声、
天に響き地に満て万木千草
△仕舞
動揺せり　△いかに鬼神も慥に
聞くらんが千方と云し逆臣に仕へし
鬼も王位を背きし天罰にて千方を
捨しかバ忽ち亡び失せしぞかし　上 況てや

あるぞ鈴鹿山は　ふりさけ見れば
伊勢の海　あの松原むらだち
来つて鬼神は黒雲鉄火を降らし
つゝ数千騎に身を変じて山の
如くに見えたる處に
見よやふしぎやな　味方の

軍兵の旗の上に　千手観音の光を
放つて虚空に飛行し　千の御手毎
に大悲の弓には智恵の矢をはげて
一度放せば千の矢先　雨霰と降り
かゝつて鬼神の勢に乱れ落つれば
悉く矢先にかゝつて鬼神は残らず

討捨てけり有難し有難しや。誠は
呪詛諸毒薬念彼観音の力を
合せて忽ち還著於本人則ち
還著於本人の敵はほろびにけりと。
観音の仏力なり

八島

梗概　（所）讃岐國八島　（季）三月

都方の僧西國行脚を思ひ立ち、八島の浦に到りて海人の鹽屋に一夜の宿を借りけるが此浦は源平合戰の舊跡なるにぞ、主の老人に其軍物語を所望せり。主諾ひ先つ義經の天晴なりし骨柄より語り始め惡七兵衛景清が三尾の屋の四郎を追ひかけて其錏を引きゝし事、佐藤繼信が能登守教經の矢先に斃れしさまなど語りぬ。僧は其話の餘り委しきに如何なる人ぞと尋ぬれば、曉頃よは我が名を知り給ふらん、名乘るとも名乘らずともよしとて暗に義經なる由を漏しぬ、斯くて僧は磯枕に臥しけるが、夢に義經の靈甲冑を帶して現れ娑婆の妄執去りやらぬよしを述べ、昔の春の合戰を思ひ出でては曽て弓を落して拾ひし時兼房の諫告に答へて、弓を惜むに非ず名を惜むなりと言ひしことなど語るさに瞋意の一念起りて激戰の樣を見せしが、いつしか夜明けて夢は破れぬとぞ。

八島（二番目）太鼓ナシ

役別		装束附
シテ	老翁	面朝倉（三光尉モ）尉髪 着附無地熨斗目 水衣 腰帯 扇 釣竿
シテツレ	男	直面 着附無地熨斗目 水衣 腰帯 扇 釣竿
後シテ	源義経	面平太 黒垂 梨子打烏帽子 白鉢巻 着附厚板 半切 法被 腰帯 太刀 扇
ワキ	旅僧	着流僧
ワキツレ	従僧二人	ワキ同装（ワキツレ無シニテモ）

八島

ワキ 三人 ヨワ上 次第
月も南の海原や、八島の浦を尋ねん
ワキ これは都方より出でたる僧にて候、我未だ西国を見ず候ふ程に、此春思ひ立ち西国にくだり、八島の浦をも一見せばやと思ひ候

二人上
春霞浮ぶ波の沖津舟
入日の雲も照添てそなたの空と
行末も遥になりし舟路経て
八嶋の浦に着にけり
セリフ有
シテツレ上一声
面白や月海上に浮んでは波濤
夜火に似たり　漁翁夜西岸

に傍て宿す　暁湘水を汲で
楚竹を焚も今に知れて芦火の
影ほのミえそむる面白さよ
月の出汐の沖津波　霞の小舟
漕連て　下　海人の呼声　二人　里
近し　上　一葉万里の船の道　只

一帆の風に任せ　夕の空の雲
の波　二人　月の後に立つ霧に
浮ぶ松原の影は緑りに移ろひて
海岸そこともしらぬ雲井の
海山や遠く続き　下　[illegible]ハへ鴎の
浦伝ひ蜑の家居も数々にて

上
○小謡
釣の暇も浪の上　霞渡りて
沖行くや海士の小舟のほのぼのと
見えて残る夕暮　浦風までも
長閑なる春や心をさそふらん
〳
ワキ　塩屋のあるじは帰りては
宿をからばやと思ひ候いかに此塩屋の

関へ案内申候 誰にて渡候ぞ
行暮たる修行者にて候 一夜の宿を
かし候へ 左様に侍へあるに
其由申候べし。いかに申候 修行者
の渡り候が 一夜の御宿と仰候 余りに
見苦敷塩屋にて候程に 御宿は叶ふ
まじい由申候へ 其由申て
候へば 塩屋の内余りに見苦敷候程に
御宿は叶ふまじい由仰候 是は
都の者にて候が 此浦始て一見の事
にて候 ひらに一夜と重ねて仰候へ
御宿は都の人と候が ひらに一夜と

重ねて仰せ候して 何と仰候ふ都の人と
やさしや実に聞けば懐かしやさらば
お宿を貸し申さん 本より栖も
芦の屋して 唯草枕と思しめせ
旅も今宵は照りもせず して 曇りも
果てぬ春の夜の 朧月夜に

しく物もなき蜑の苫 屋島に
たてる松の苔の莚は痛はしや
ヨ上 扨慰みは浦の名の 群居る
田鶴をご覧ぜよ などか雲井に
帰らざらん旅人の古里も都と
聞くぞ懐かしや 我等も元は

とて軈て涙に咽びけり
いふや此浦は源平両家の合戦
の衢と承り及びてあれば平家の事にては
似合ぬ事ながら終夜の物語
給へしそ語りて聞せ申すべし いざ
其頃は元暦元年三月十八日の

事なりしに平家は海の面一町斗に
船を浮べ源氏は此汀に打出給ふ
大将軍の御装束には赤地の錦の
直垂に紫裾濃の御着長鐙
ふんばり鞍笠に[illegible]立あがり
一院の御使源氏の大将検非違使

五位の尉源の義経と名乗給ひし
御骨柄。天晴大将やと見へし。今の
やうに思ひ出られて候 其時
平家の方よりも詞戦ひ事終り。
兵船一艘漕寄て浪打際におり立て。
陸の敵を待懸しに 源氏の

方にも続く兵五十騎斗中にも
三尾谷の四郎と名乗て真先懸
てみへし所に 平家の方にも
悪七兵衛景清と名乗三尾谷を
目懸戦ひしに 其時みをの谷ハ。
太刀打折てちからなくすこし汀に

景清追懸三尾の
屋が着たる甲の錏をつかんで
後へ引ば三尾が屋も身を遁れ
んと前へ引く互ひにえいやと引
ちからに鉢付の板より引ちぎつ
て左右へくわつとぞ退にけり是を

御覧じて義経は馬を汀に打寄せ
給へバ佐藤継信能登殿の矢先
に懸りて馬より下にどうと落れバ
船には菊王も討れけれバ共に哀と
思しけるか船は沖へ陸は陣に相引に
引汐の跡は鬨の声絶て磯の波松風

ぞうりの心寂しく秋なりけるぞ

ロンギ ヨ上

不思議なりとよ賤人よ餘りに優しき

物語其名をなのり給へや　我名

を何とゝふ浪の月や秋ぞも朝倉や。

木の丸殿にあらばこそ我名乗をして

も由なし　実や詞を聞くから

に其名床しき老人の　二人 昔を

語る小忍衣　恨しも今ハ

二人 シメル 春の夜比一時うし国の移る暁

ならバ修羅の時よ成べし　その時に

我名やあのらんたとひ名乗らずとも

名乗るとてもよし經の憂世の夢だし

覚まし給ふなよ。　中入

ワキ　唯今の老人は義経の世にも夢心。
さまさで待と思ふる　ワキ二人　声も
更行浦風の。松が根枕
そのまゝて。思ひをのぶる苔衣
まねて夢を待居たり

シテツレ上　一声　落花枝に帰らず破鏡ふたゝび
照らさず。然れども猶妄執の瞋恚とて。
鬼神魂魄の境界に帰り我とこの身
を苦しめて修羅の巷に寄りくる。
波の浅からざりし業因かな

ワキ　早暁にも成やらんと思ふ寝覚の

枕より甲冑を帯しゝ故ぞかし
判官にして海に捨てず　シテ　我義経が
幽霊なるが瞋恚にひかるゝ妄執に
より猶西海の波に漂ひ生死の
海に沈淪せり　愚かなりながら
こそ生死の海にもこゝろ出れ真如の月

乃　シテ　春の夜なれど曇りなき
心も澄める今宵の空　昔を
今に思ひ出る　シテ　舟と陸との合戦
の道　所からとて　シテ　忘れ得ぬ
武士の屋嶋に入るやつきゆみの
もとの身ながら又こゝに弓箭の

道ハ海より深き迷ひぞや生死の海山を離れやらで帰る八島の
うらめしやとにかくに執心の残りの
海のふかき夢物語なり
忘れぬ物を閻浮の古郷に
去て久しき年なみの夜の夢路に

通ひ来て修羅道のありさま顕す
なり 思ひぞ出る昔の春 月も
今宵に冴えかへり 本の渚ハ
爰なれや源平たがひに矢先を
揃へ船を組駒を並べて打入れ
足なミに轡をひたして攻戦ふ

シテ 其時何とかしたりけん。義経弓を
取落し。浪に揺られて流れしに
其折しも引汐にて。遥かに遠く
流れ行くを　シテ 敵に弓を取られじと。
ワキ 義経駒を游がせて。敵船近くなりし
程に　ツレ かゝる敵は是を見しよりも。

舟をよせ熊手にかけて。既に危く
見え給ひしに　シテ 其時熊手を切
拂ひ終に弓を取返し。本の渚に
打上ればツレ 其時兼房申す様。
口惜の御振舞や候。渡辺にて景時が
申しゝも是にて候ぞ。假令千金を

のべられたるなりとも。御命にてはかへ給ふ
べきかと。涙を流し申ければ。判官
是を聞し召。いやとよ弓を惜むに
あらず。義経源平に弓矢を
取て私なし。然れども佳名はいまだ
半ならず。されば此弓を敵に取られ

義経は小兵といはれんは。無念の
次第なるべし　よしそれゆへに討れ
むは力なし義経が運の極めと
思ふべし。さらずは。敵に渡さじと
て波に引かるゝ弓の。名は末代に
あらずやと。語り給へば兼房。扨

其れの人迄も皆感涙を流しけり

シテ 智者は惑はず 同 勇者は懼れず

のやたけごゝろの梓弓敵には取伝へ

じと惜むは名の為惜まぬは一命

なれば身を捨てゝこそ後記にも

佳名をとゞむべき弓筆の跡なる

べけれ シテ 又修羅道の鬨の声

同 矢叫びの音震動せり カケリ

シテ 今日の修羅の敵は誰そ何能登守の

教経とやあら物々しや手並は

知りぬ思ひぞ出づる壇の浦の

同 其舟軍今は早閻浮に

海へる生紀の海山一同に震動して
舡よりは鬨の声　陸には浪の
楯や　月に白むは　剱の光り
潮にうつるは　兜の星の影
水やそら　空行もまた雲の波の
打合刺ちがふる船軍のかけひき

浮沈むとせし程に　春の夜の浪より
明て敵と見えしは　群居るかもめ
鬨の声と聞えしは　浦風なりけり
高松のうらかぜなりけり　高松の
朝嵐とぞなりにける

箙

梗概　(所)攝津　(季)三月

元暦元年攝津國生田の森の戰に梶原平三景時の子息源太景季の箙に梅花を挿して功名せし事を作る、景季此時二十二才此梅花笠印となりて功名人に勝れしより以來今世迄も箙の梅の名あり、仍ち西國より出たる洛陽一見の僧偶々生田の里に箙の梅を尋ねたるに一人の男來り梅の謂を説く旅僧此の花を懷かしく思ひ一夜を木陰に臥したるに源太景季ありし昔の姿まで現れ勇ましき合戰の物語をなし我跡を弔へのしと聞こえて夢のさむれは夜は明けにけり。（箙とは弓の矢を盛りて背負ふ武器なり）

箙

（三番目）太鼓ナシ

役別		装束附
前シテ	里の男	着附熨斗目 白大口 素袍ノ上 腰帯 小刀 扇
後シテ	梶原景季 霊	面平太 黒垂 梨子打烏帽子 白鉢巻 着附厚板 法被（右肩脱） 半切 腰帯 太刀 扇 紅梅ノ枝ヲ右ノ後ヘサス
ワキ	旅僧	着流僧
ワキツレ	従僧二人	ワキ同装（ワキツレ無シニテモ）

箙

次第 春を心のしるべにて。〳〵。うからぬ旅に出うよ

詞 是は西国方より出たる僧にて候。我いまだ都を見ず候

程に。此春思ひ立洛陽一見と志し

旅衣。筑紫の海の舟出して

八重ハ汐路をはる〴〵と分けこし
方の雲乃波　煙りも見えて松原
乃里の名とへバ須磨の浦　生田の川
に着きにけり　急ぎ候ほどに。
生田川に着きて候。又あれを見れバ
異なる梅の今を盛りと見えて候。

心静かに一見せばやと思ひ候

シテ　ヨワ吟　上
来る年やの生田川。
流れて早き月日かな。　上　飛花
落葉の無常ハ又。常住不滅の栄を
なし一色一香の艶情ハ。無非中道
の眼に応じて。人々個々円成の

観念沈みて至り難し定なれ
身上やな 人我有為の転変ハ
現世のうちに顕れて 閻浮は
悔る妄執の しばし 其いきしこの
海なきや生田川の幾世までも
夢の巷に迷ふらん よしとても

身の行末定め有りとても終まで
夢共辿よ迷ふらん

コ紀
いふかひべき事のはゞあれなる梅ハ

名木にて候 して さんば箙の梅と

申し候 コ紀 箙の梅とハいつの世より

名木にて候ぞ して 此屋是ハ私よ

付られたる異名までは　よろしく
それより付られたる異名などは抱候へ
総じて此生田の森は平家十万余
騎の追手なりしに。源氏の方より
梶原平三景時同く源太景季。
此花を手折て箙にさしぬ。其の花

笠印に付と成て。功名いちじるく名を
挙しよりして。景季かへりて此花
を礼し　中　則ハ情叡感の神ぞと
敬せしより以来。名将は古跡の花
なればとて。箙の梅とハ申なり
梅は名将の古跡といひ名木といひ。

名残をせぬ年ぞて　来るハ、
袂なき春雨のふるをさへくる名をと
留て　其景季は盛なりし
若木の花はちらぬ　箙の梅
の　今までも　名を留し
あるじハ花のかげ季の。

末の世うけて生田川に　身を捨
て我名ハ久しけれ　武士の矢猛
それハ花よりもくちら筆の名こそ　妙
なれや　抑も平家、
去年播磨の室山海中の水島
二ケ度の合戦に打勝て　山陽道

南海道合せて十四ヶ国の兵都合
十万余騎は其勢一の谷にぞ籠り
ける　扨て東は生田の森西は一の谷
を限って其間三里が程は荒海より
浦々には数千艘の船を浮べ陸には
赤旗いくらもそこに並べ春風に

靡き天に翻る有様は猛火雲を
焼くところに似たり　総じて城の
前は海後ろは山左は須磨右は明石
のとよりかくより行かふ船の友寝も
手ぬる声となり　時しも
二月上旬の空なれば須磨の

若木の櫻もまだ咲やらぬ薄雪に
さえ返る浪宴許よ生田乃杜の
川から燈りともれてかつ笑んする梅
がえ一花咲けるは天下の春よと
軍の前途を祝ふ心の花も咲かくる
去程に味方の勢六万余騎を二手

に分けて範頼義経の追手搦手の
海山かけて須磨の浦四方を圍みて
押寄せる魚鱗鶴翼ふるを
斯ばかり後の山松に群居るは
殘りの雪か白妙よねぐらを立たん
真名鶴は翅を連ぬるその景色。

雲に比へて鶚し浦は海人様に
漁夫の舟数々数へて漁り焚火も
かげろふや嵐も浪も須磨の浦
雄山も小山も遠く響ける
さながら天の鳥の音もかくやらん

ロンギ ヨ上

はや夕ぐれの梅の花月にあり行

して 上 我は
旅枕一夜の宿もとかしぬへ
宿りも志ら雲の花を主と思しめ
さゝ下臥を待ち給へ　花の主と
思へとは如何なる人やらん
して 今は何をか包むべき我は此世に
亡き影の　跡弔はれんと夕草の

シテ 其の季も遠き昔なり

は

他生の縁有りて一樹の蔭の花の縁

小篠の宿梅の木の下に宿らせ給へ

我は又世をうぐひすの塒は此の

花よとて失せにけり跡もよとて梢

失せにけり跡も夜となる梢の 中入

衣を片敷て更行く夜半に生田

川水音も澄む嵐もすがら花の

木蔭に臥たりけり

シテ ツ上 一声 魄は陽に帰り魂は陰に残る執心

却来の修羅の巷を去つて生田の

名にし負ふ血は涿鹿の川となり

ハ

紅波楯を流しつゝ白骨を
碎く戦ひ月とも日とも
まにれ影や長刀のやみ〳〵と
眼も眩ミしも修羅道の
苦しみ遁れずせよ　不思議
やあはたもそれなる若武者の。

殺は梅の枝をさしぢちも近づくと
見え給ふは成人して捨しまへぞ
今は何をか包むべきそれは梶原
平三景時が嫡男源太景季。
他生の縁は一樹の陰よ夢中の
打こしに
對面向顔きとなれ　中　ノ　身尊き

人なれば法味を請んと魄霊の。
魂ハ現まで来りたり跡弔ひ給へと
いはんとすれば あら恨めしや
又修羅の瞋恚の敵乃責のまゝに乱
せよや聖 実にそれは怖しや。
して
釼ハ雨と降りかゝりて 天に響て

仕舞
地もうごき 山も震動して
海も鳴り 雷火も乱れ 悪
風の 紅焔の旗を靡かし 紅焔乃
旗をなびかして。閻浮に帰る生田川
の波を立て水を返し 山野海川も
修羅道の巷と成りぬ こはいかに。

浅ましや　しばらく名を包めて
あればさて　古る縁を静めてこれば
所は生田なれり　時も昔の春の
梅も盛りなり　一枝を折りて箙に
挿せば元来雅びたる若武者に
あひふ若木の花かつらかければ

箙の花も源太も我先駈んと咲き
うけんとせむの花も梅も散るか
いゝ面白や敵は兵者　是をとりて
天晴れ敵よ能き敵ぞと　八騎が中に
取籠められ　兜もおち
落されて　大童の姿と成て

郎等こそ騎ようしろを合せや
向ふ者をば　とゞみうち
又廻り逢ふぞ車切や蜘蛛手かく
縄十文字鶴羽翼飛行の秘術
をぞ程とみへ流る内に夢覚て
志らしと夜も明きばすぐ

なりや旅人よ暫て花の根よ
鳥ハ古巣にかへる夢のとりハ
ふる巣よ籠るなり翼を弔ひて
たび旅へなき跡をとゞめてたび
旅人

兼平

梗概　（所）近江　（季）四月

今井四郎兼平は木曽義仲の家臣にして樋口兼光の弟なり義仲朝敵となりて頼朝に攻めらるゝや義仲の軍に従ひ兼平之を勢田に拒ぎしが宇治既に破れ頼朝の兵都に攻め入ると聞きて急ぎ赴く途中義仲と粟津にて行逢ひしかば漸く集りたる兵三百餘騎にて大いに戰ひしに義仲の兵死傷殆んど盡しかば兼平は義仲に自殺をすゝめ自ら防戰し我は是れ今井四郎兼平なりと敵勢の中へ駈入れば皆其勇氣に恐れて近付く者なし日本無双の勇士の最期を見て後の世の手本にせよとて遂に我刀に貫ぬかれ馬より落ち天晴の戰死をせし有様を兼平の亡霊現はれ旅僧に物語るなり前段は船人の琵琶湖上の風景と仰ぎ見る叡山の佛説とを述べしなり。

兼平

太鼓ナシ

役別		装束附
前シテ	舟人	面三光尉 髪 着附無地熨斗目 着流シ水衣 肩上ケ 腰帯 腰蓑 扇 後ヘサシ 棹竿持
後シテ	今井兼平の霊	面平太 黒垂 梨打烏帽子 白鉢巻 着附厚板 法被右肩脱 半切 腰帯 太刀 扇
ワキ	旅僧	着流僧
	作物	舟ノ先ニ柴少シ付 仕手柱ノ際ニ置 尤脇着座ヲ見テ出シ中入ニ引ク

兼平

ワキ次第 ヨ上

始て旅を信濃路や〳〵木曽の山家をとはうよ　是ハ信濃の国木曽の山家より出たる僧にて候。扨も木曽義仲ハ江州粟津が原にて果給ひたる由承及て候程に。

滋幣らひやさん為口今葉ばの京
へと急ぎ行ほや　上　信濃路や木曽の
かけはし名にしおふ　錦
とふや野べの草乃枕の仮枕
旅を重ねつ日を経て程なく
近江路や矢橋の浦につきにけり

セリフ有
一ツ上　世の業の其憂きを
身は浮む業やたらぬ世せんまま
こがるらん　ヨミ　なふ〳〵　つれ〳〵
小便船やさらなふ　して　是は山田
矢橋の渡し船までもなし頼んで
味積たる船まては　ヨミ　我祭るも

其舟とはいかにてはへぜ利師渡りふ
舩もなし、殊更(コトサラ)武家(ケ)の身にてはゆへぞ。
別(チ)の御利益(ヤク)は、舟を渡(タ)してたびあへ
実(ジツ)もなく、武家の情(ジ)なき身なりませで
余(ヨ)の人は、語り経ふ毎し、真実(ジン)経(ウ)
まも如渡得船(ニヨドトクセン)に、舟待(マチエ)得る

かゝる折よりも、なき海(ステル)
旅行(リヨカウ)の暮(クレ)、さ(アフミ)旅人(リヨ)の
矢走(セ)を渡(タ)る舟なれば、とても丈(?)旅人の
渡してたまへ、是又浮世(キ)を渡る
其舟の(キ)、流(ホザ)れぬ袖も水馴竿(ミナレザヲ)
のりなきぬ人なれど、法(ノリ)の下(クダ)人にて
待ゆかば、舟をばいかで惜(シ)むべき。

疾く流れし　いふ
神慮も申べきものは　何事
にてはぞ　先向ひに当て大山の
みえてはいかり及びたる比叡山は
さればこの主社古比叡山はよ　権現は山王
二十一社茂りたる森は八王子に戸津

坂本の人家ものごく残りなくみえては
都の比叡山は王城よりは艮よ
当つくはう　夫我山は王城の
鬼門を守り悪魔を拂ふのみならず
一佛乗の峯とも申すは霊鷲の御山
をかたどれり又天台山と号するは

震旦の四明の洞をとう山より傳教
大師桓武天皇と心を一つにして
延暦年中の御草創吾立杣と號し
給ひし根本中堂の山上まで續り
なくてては　偖ゝ大宮の
仏在所もしどのやらんもかの

坂本の内ほう
さればこの南の麓
おしなべて木深き林の内に我等大宮の
仏在所なり爰こそ也　有難
や一切衆生悉有仏性如来と
説く時は我等ごときの者までも頼もしう
忽之　仰の如く仏衆生通ずる

身なりお僧も我をも捨てゝこのらじ
一佛乘の　峯には舎那の
梢をならべ　麓に止観の海
をたゞへ　又戒定恵の三学を
見せ申して　三塔と名付　人ま
ゆうき　一念三千の機を顕して

三千人の衆徒を置き圓融の法も曇り
なき月の横川も見えたりや扨又麓は
さゞ波や志賀辛崎の一つ松七社の
神輿の御幸の梢なるべしさゞ波や
水馴竿漕ぎ行く程は遠き向ひ
の浦波の霊ばの島は近くなりて。

跡ハ春を花も波の昔がたりの山桜、
青葉にておもかげもなつ山の移り
行くや青海の峯小舟のしばしまも。
暇ぞ惜き浦波のよせくる
磯際の雲ばよそまじく消ぶあま。
袖をひるかへ

中入

草枕 日も暮れ夜も曇りうば、
雲ばの名残何の浮世に長らへいざや
帰らん。 一声 白骨を
砕く苦しみ眼精を破り。紅波
楯と流れる装ひ。柳緑残花を
乱る雲水の雲ばれ松の嵐よ

鬨作りそふ声でに　修羅(シユラ)の
ちまたは騒(サワ)がしや　不思議やな
粟津の原の草枕に甲冑(カツチウ)を帯(タイ)し
見え給ふはいか成(ル)人(ド)にてましますぞ
誰とはなどやうたてしや御身是迄(マデ)
来(タ)り給ふも我(ガ)亡(ナキ)跡(アト)をとはんとの
志にてはあらざるや兼平是まで
参りたり　今井の四郎兼平は
今は此世に無(キ)人なり。扨は夢にてある
やらん　いや今見る夢のうち。
現(ウツヽ)にもまたやみなれ棹の舟まで見えて
えし物語するも忘れ給ひけり

そもや舩をわたせとは矢ばせの
浦の渡し守の　舟人を我を
兼平が眼に見えし姿なき
されば社始めより舟にある人とは見えに
川ぎしの柳は昨日のふな人は　舟人よ
非まで　漁父にも　あらぬ

武士の矢ばせの浦の渡し守やその
浦乃渡し守とし見えしは我ぞかし
同じくは我舟を法の舟に乗せ
我をも又彼岸に渡してたび給へや
クリ 上
夫有為生死の衢来りて去る事
[illegible]

泡沫の哀なる身なるらん　唯是
槿花一日の栄　弓馬の家に
住む月の僅に残る兵の七騎と
なりて此松原に落ち給ふ
兼平瀬田より参りあひて又三百
余騎となりぬ　上　其後合戦

度々にて又主従二騎に討ちなさる
今は力なし　あの松原に落ちて
御自害候へと兼平すゝめ申せば
心細くも主従二騎粟津の松原
さして落ち行き給ふ　クセ　下　兼平申すやう
後より御敵大勢にて追ひかけたり

防矢仕らんとて。駒の手綱を返せば。
義仲は諚ありけるは。多くの敵を
遁れしも汝と一所にならばやと思ふ所存
ありつる故ぞとて。同じく返し給へば。
兼平又申すやうは。口惜きさは御諚候か
さればこそ義仲の人手にかゝり給
はん事末代の御恥辱。只御自害
有べし。今井も軈て参らんと
兼平に諫められ。又引返し落ち給ふ
比は睦月の末つかた　春めき
ながら冴え返り。比良の山風の雲行
空はくれはどり。あやし[illegible]通ひ馴れ

末むら雪の薄氷深田に馬を
駈落し引けどものぼらず打てども
ゆかぬ望月の駒の頭もみえばこそ。
こは何とならん身の果為方もなく
あきれ果て此侭自害せばやとて
刀をとりなほし給ひしがさるにても

兼平が行衛いかにと遠方の跡を
見かへり給へバ　して　何国より来り
けん　今ぞ命ハ槻弓の矢一つ
来つて内甲にからりと射る痛
手にて海しやませたまりもあへず
馬より遠近の土と成所ハ爰ぞ

兼平

我より先に君の御自害を、先見ひて
たび給へ
ロンギ 上 実痛はしき物語
兼平の御最期ハ、何とかならせ給ひ
けん
して 兼平ハ[illegible]で
我ハ其隙にも、御最期の御供を
心ならずも見ざりけり
は 依て
後は思ひしも、敵の方より声を立て
して 木曾殿討たれ給ひぬと
は 呼ばはる声を聞しより
して 今は
何をか期すべきと
は 思ひ定めて
兼平ハ
して これぞ最期の荘厳と
は 鐙ふんばり大音あげて
して 木曾殿

の湖に今井の四郎　兼平と
名乗りかけて大勢に割て入まで
東より一騎当千の秘術を顕し
大勢を粟津の汀に追詰て
敵を波のまくり切　蜘手十文字に
討取りけるが　主の最期に自害の
手本よとて　太刀をくはへて
逆様に落てつらぬき失に
けり　兼平が最期の武勇を致る
かまて有様かな

巴

梗概　（所）近江國粟津原　（季）正月

木曾の山家より出でたる僧都へ上る途次近江國粟津が原まて休らふ處に一人の女の神前に參りて涙を流し居りければ不審を抱きて仔細を尋ねしに木曾義仲を祀れる神なりといふにぞ、僧は同郷の縁にて禮拜しける程に、入相の鐘の音の湖に響く頃となり彼の女は何處ともなく姿を消しぬされば僧はこの原にて義仲の跡を弔ひ居けるに以前の女甲冑を帯して現れ我は巴と申しゝ女武者なるが女とて義仲の御最期の御供叶はざりし恨の執心残り今に至るも浮び難しとて義仲上洛の次第より粟津ヶ原に於ける敗戰の樣に及び義仲と我身（巴）との袂別の悲慘なりし有様又義仲自害の後は形見を持ち信樂笠を傾けて泣々木曾路をさして歸りし哀なる有様など懇に語り我妄執を晴して給はれと願ひて姿は消失にけるとなり。

巴

（三番目）

役別		装束附
シテ	里女	面小面 鬘 鬘帯 着附箔 唐織着流 小珠数又ハ扇 榊小枝左ニ持
後シテ	巴御前	面増髪（小面モ） 黒垂 梨打烏帽子 白鉢巻 着附箔 唐織壷折 白大口 腰帯 太刀長刀 白練小袖 小太刀 笠
ワキ	旅僧	着流僧
ワキツレ	従僧 二人	ワキ同装（ワキツレ無シニテモ）

後見 所も遠に見へさりけりト云時分ニ白練小袖ノ上ヘ守袋ヲ載セ正面先ヘ置ナリ（尤モ小袖ヨリ左ノ方ニアル様ニ出ス）
物着唐織壷折ノ太刀ノ緒ニテ結ヒ舞台ニテ壷折ヲ脱白練ヲ壷折梨打烏帽子ヲ脱キ左ニ太刀右ニ塗笠ヲ持ナリ

巴

ワキ次第 ヨワ上

行ど深山も麓なし〳〵木曾路の旅に出うよ

詞 是ハ木曾の山家より出たる僧にて候我いまだ都を見ず候ほどに此度思ひ立都へ上り候

上 旅衣きそのみ坂を遥ゞと〳〵

思ひ立つ日も美濃尾張定めぬ
宿の暮毎に 旅を重ねし日を
経て行けば程なく近江路や鳰の湖
とは是かとよ 急ぐ程に
江州粟津が原とやらんに着きて候
此所に暫休らはばやと思ひ候

シテ上哥
面白や是は浦波静なる粟津の
原の松陰に神を斎ふや祭る事
実神感も新たなりや 粟津が
原は神ぞのにては程ふ巫どもを
楽しぞやと思ひ候 あら有難の
御事や昔の事は思ひ知られて候

コトバ ふしぎやな是成女性の袂より
涙を流し給ふハ。之もし不審ふ
此そ以へ　扨ハ此僧ハつゞらの事を
仰けれバ　コトバ ちんバ神ふ乗り涙様
流し給ふ事不審にてハ　愚
と不審玉ふや。傳聞行教和尚ハ。

宇佐八幡よ詣給ひ。一首の哥よ
いちく 下歌 何事のおはしますとハ
志らねども。忝さに涙こぼるゝと。
かくよ詠じ給ひしかバ袂も哀や
思し召れけん。御衣の袂よ影を
移し。夫より都男山よ誓を示し

謡ひ国土安全を守りの御恵みと
不寝し謡ふや　中さし住ふ
女性なれば此世の数に近き住居
こそ名をよしおひたる優しさよ
抑これ僧の住給ふ在所は何国の
国やらん　是ハ信濃の国来る

の山家の者にては　して　来る山家
乃人ならバ霊ずばかりの神の御名をと
問ぞたいゝで顔つきぞ　是ぞ相撲の
住給ふ来る義仲のゞ名に同殺
神といはれぬ身の祝ひ謡へや旅人よ
ふしぎや抑ハ義仲の神とつらハ生

此所よごまし給ふは有難さよと。
神前に向ひ手を合せ　去しその
昔我君よ名は今も。
有明月の義仲也。佛と現じ神と
なり世を守り給へる誓ひぞ
有難かりける旅人も一樹の蔭。

他生の縁と思し召し此松が根に旅居
し夜もすがら経を読誦して御嚢
を慰め給ふ　有難き値遇
げに実ありがたき値遇かな
去程に暮て行日も山の端に入相
の鐘の音也。浦はの浪に響き流れ

何れも拙き夫れ節よ。我も
亡者の来りて其名をこの世に
志らば八十匹人に。とも世語りと
名香の草叶みも川に入りより
露を片敷く草枕　日も暮れ
我らも成りしかば粟津が原の哀れ

世に亡き影をや弔らはん
落花空しきを知る。流水心
なうしておのづからすめる心は
あらち寂乃　罪も報ひも
因果の苦しみ今は浮かん法の
功力に草木国土も成仏なれば。

況や生ある畜道の身ならず。彼是
一樹も影もしやく荒有難や
ふしぎや粟津が原の草枕を。
見れば有流る女性なるが甲冑を
帯せる婦しきさよ　中々に
巴と云し女武者。女とては最期よ。

御自害せざりし恨ミ　執心
残て今迄も　君辺に添へ中を
ず　恨ゝ恨も　ありそ海の
粟津の汀まで波打ち死果迄も。
御供申すべかりしを　女とては最期
ますてられ参らせし怨めしや　二

身ハ恩の為。命ハ義による理。
誰か弓取の身乃最期に
臨んで後名を惜まぬ者やある
抑も義仲の信濃を出させ給ひ
志もやみ方陣の旗勢鉤もとなり之
攻上る礪並山や倶梨伽羅。志保
の合戦にても分捕功名の数。
誰におもてを越されけ達に劣る誉勤
も亡世語りも名をもし思ふ分
されど時刻の到来　運尽きれば
力もなぎちによせる粟津世の
草の露霜と消え給ふ。所ハ爰ぞ

お僧達同國の人なれば此縁に
とはせ給へや抑此粟津の合戦まで
討れ給ひし義仲の最後を語り
おはしませ此ハ睦月の空なれ
ば雪ハむら消に残るをあぶ [?]
通ひ路と汀をさして駒を走らすに [?]

落行ふ薄氷の深田にかけこみ
弓手も馬手も鐙も沈んで
おり立たん便りもなくて手綱に縋りて
鞭を打てども引方も渚のまゝなり [?]
前後を忘じて控へたりしハいかに
浅ましやかゝりし所に自ら駈寄 [?]

てうんまれど重手は負ひぬ御自害を勧め
ま召せ参らせとて松が根にて御供し。
まや御自害に巴も供と申せば
汝は女なり。忍ぶ便りも有るべし。是
なる守り小袖を木曽に届けよ
此旨を背かば主従三世の契絶果。

永く不興と宣へば巴はともかくも
涙に咽ぶ計り也。

△仕舞

△上 斯て御前を
立上りがりみれば敵の大勢、あれは巴か
女武者、余すな漏らすなと敵
手繁く懸かれば、今は引くとも遁るまじ。
いで一軍嬉しやと巴少も騒がず。

わざと敵を近くなさんと長刀
引そばめ少し怖るゝ気色なれば
敵は得たりと切てかゝれば長刀柄
長くおつ取のべて四方をはらふ
八方払ひ一所に当るを木の葉返
し嵐も落るや花の滝浪枕を

並んで戦ひければ皆一方に切立
られて跡も遥かに見えざりけり
跡もはるかに見えざりけり今は
是迄なりと立帰り我君を
見奉れば傷はしや早御自害候ひ
て此松が根に伏給ふ御枕の程に

泣く袖濡れの身守りと小袖をとりて
なく〳〵賜りて死骸に御暇
申し行けども悲しや行きやらぬ
君の名残をいかにせんとは思へども
くれはとりあやなや御遺言のかなしさに
粟津の汀に立ち寄り上帯切り

物着ノ間 シヅカニ

物の具心静かに脱ぎおき梨子打烏帽子
同じくかしこに脱ぎ捨て小袖をとり
かづき其際までの佩添の小太刀を
衣にひき隠し所はここぞ近江なる
信楽笠を木曾の里に涙と共に
唯ひとり落ち行きしうしろめたさの

319
449

燒香をとりてたむくへし

昭和四年三月五日印刷
昭和四年三月十日發行

著作權所有
複製不許

昭和改版
撮本

訂正著作者　廿三世　金剛右京　[印：金剛右京]

發行兼印刷者　東京市神田區錦町二丁目拾番地　檜常之助

發行所　京都市二條通麸屋町東北角　合資會社　檜書店　[印：檜書店印]

檜書店京都出張所

終